

「運命の秤」についての一考察

——ホメロスとオリエント宗教——

小 川 正 廣

I

ギリシア文学では、「運命の計量」(ケーロスタシア *kerostasia*) あるいは「魂の計量」(プシュコスタシア *psychostasia*) というモチーフがしばしば用いられた。このモチーフが現われる最古の文献は、ホメロスの『イリアス』であり、ここでは、まず第8巻においてギリシア軍とトロイア軍の二つの「死の運命」(ケール・タナトイオ) が神ゼウスによって天秤にかけて量られ、さらに第22巻では、英雄アキレウスとヘクトルの「死の運命」が同じくゼウスの秤によって量られる。その後この「運命の計量」は、若干の変更を加えられてアイスキュロスの悲劇の素材となった。すなわちこの悲劇作者は、英雄アキレウスとメムノンの決闘を主題とする作品『魂の計量』(プシュコスタシア) を創作し、その際「運命」(ケール) のかわりに「魂」(プシュケ) を計量の対象として設定して秤の場面を描いて、それによって二人の戦士の勝敗を表わしたと伝えられるのである。このほかにも「運命の秤」についての言及は、ギリシア文学において散見される。それらは、同じくアイスキュロスの作品において最も多いが、神の裁定の道具としての天秤について述べられる個所を調べれば、アリストパネス、バッキュリデス、テオグニス、パラティナ詞歌集、スミュルナのクイントスなどと多数の例が見いだされる。一方ローマ文学ではこのモチーフは少ないが、しかしその中で、ウェルギリウスが『アエネイス』第12巻のアエネアスとトゥルヌスの決闘の場面において語ったユピテルによる二人の英雄の「運命の計量」は、貴重であるとともに重要な例である。

このように秤による「運命の計量」あるいは「魂の計量」は、ホメロス以来ギリシア・ローマ文学の伝統的なモチーフとなっており、さまざまな文脈において用いられた。それは、たんに死運の決定を示すだけでなく、神の公正な裁きの到来を予告したり、あるいはそうした神的裁定の進行の具象化としても機能した。一方このようにギリシア・ラテンの古典文学に普及した「運命の秤」のモチーフも、その起源を尋ねれば、じつはギリシア人の発明ではなかったことは周知の事実である。例えば「運命の秤」というと多くの人の念頭に浮かぶのは、おそらくまず古代エジプトの『死者の書』の中の「心臓の計量」の場面であろう。古代エジプトの宗教では、人間の魂は死後、冥界の神オシリスの館で審判を受ける。魂は、その審判に合格すれば、永遠の生命を授かって、イアルの野という一種の極楽浄土で至福の生活を送ることができる。

そして、その「運命的」審判のプロセスの最後の試練をなすのが、天秤による審判なのである。

ところで、ホメロスの『イリアス』に表われた上のゼウスによる二つの秤の裁定のうち、第22巻のアキレウスとヘクトルの決闘におけるそれは、明らかに二人の人間の「死の運命」(ケール)を量るためのものである。その場面は、トロイアの城外をヘクトルがひたすら逃げ、アキレウスがそれを懸命に追いかけている最中に挿入されている。

さて二人が四度目に泉にさしかかったとき、
まさにそのとき父神は黄金の秤をひろげ、
二つの、永い悲嘆を招く死の運命をそこに載せた、
一つはアキレウスの、一つは馬を馴らすヘクトルの運命を。
神は秤の真ん中をつかんで持ち上げると、ヘクトルの定めの日が沈み、
冥府の方に向かった。するとポイボス・アポロンは立ち去った。

(『イリアス』22.208-213)

こうしてヘクトルの死は秤によって決定され、アポロンはただちに彼を見捨てて去る。そしてヘクトルはそのあと、弟デイポボスに変身した女神アテネにも欺かれ、やがてアキレウスに挑んで討ち死にする。最高神ゼウスが天秤を取り出し、両方の皿に二人の英雄の「死の運命」(ケール・タナトイオ)を一つずつ載せて量るこの場面は、一見したところ戦いの最終的段階が到来したことを視覚的に表わし、決闘の結末を聴衆(読者)に予告するための象徴的技法にすぎないように思われる。だが、じつは計量の結果はただちに物語中の神々の実際の行動に影響を与えているのであり、秤の皿が降って「定めの日が沈んだ」ヘクトルは、たちまち神々の支援を失ってまもなく死ぬことになる。つまり秤の計量は、それ自体が人間の生死を裁き、権威ある「判決」の効力を持つものとして描かれているのである。

それではこうした「秤」の動きは、それを手に持っている神ゼウスの意思と必ず一致しているのであろうか。そしてまた、もしこの両者が一致すべきものとするなら、それはそもそもゼウスの意向が秤の計量の結果に左右され、それに従属しているためなのか。それとも、むしろ秤の方が、ゼウスの意思にそって動き、最高神の決定を表明する道具にすぎないからか。古来こうした疑問は、この秤の場面の意味を真剣に考える人々を悩ましてきた。この疑問は、突き詰めれば当然「運命」と神々との関係という重大な問題に行き着かざるをえないであろう。「運命の秤」の考察を試みる本稿でも、もちろんこの疑問を避けて通るわけにはいかない。しかし、この問題に対しては大きく迂回したあとに近づきたいと思う。

運命と神々との関係は重大な問題である。しかしそれ以上に筆者の興味をそそるのは、この『イリアス』第22巻の有名な秤の場面が、あくまでも二人の英雄の個人の運命を決定するものだという点である。すなわちこの場面で天秤の二つの皿に載せられるのは、アキレウスとヘク

トルという二人の人物の「死の運命」であり、そのことはテキストでは、父神が「二つの死の運命をそこに載せた」(210) という詩行の *dyo kere thanatoio* の句(双数の *kere* 「運命」に、さらに念入りにも *dyo* 「二つの」という数詞を付けている)と、次行の「一つはアキレウスの、一つは馬を馴らすヘクトルの運命を」(211) という説明によって明確に示されている。

このように、後代の古典文学に影響を与え、『イリアス』自体の中でも重要な機能を果たす第22巻の秤の場面は、個人の運命を決定するものとして語られている。ところが他方、ホメロスの作品におけるもう一つの運命の計量の場面、すなわち第8巻の秤の場面では事情は少し異なっている。第8巻ではアキレウス不在のギリシア軍とヘクトルを先頭に戦意を燃やすトロイア軍とが二日目の戦闘に入り、ゼウスも神々の介入を禁じて人間界の戦力のみ争いとなる。戦場は早朝から大混戦の様相を呈し、「大地は血の海と化す」(65)。そしてやがて「太陽が天の真ん中あたりに達したとき」(68)、ゼウスは秤の計量を行なう。

まさにそのとき父神は黄金の秤をひろげ、
二つの、永い悲嘆を招く死の運命をそこに載せた、
馬を馴らすトロイア勢と青銅の鎧のアカイア勢の。

神は秤の真ん中をつかんで持ち上げると、アカイア勢の定めの日が沈んだ。

(『イリアス』8.69-72)

この四行の構文は、先に引用した第22巻の秤の場面と同じである。また69-70行の詩句は第22巻209-210行とまったく同一語句であり、72行は前半が第22巻212行と同じ表現、その後半は「アカイア勢」以外は同じ単語を用いている。同一詩句の繰り返しという点で、この四行には定型句(フォーミュラ)が凝縮して使用されており、したがって第8巻69-70行と第22巻209-212行はともに、秤の場面の伝統的表現にもとづいて作られたと推測される。しかし第8巻の秤の場面には、第22巻とは異なる点が認められる。それは誰にも明らかなように、ここで計量の対象となっているのが、個人の運命ではなく、集団の運命であるということである。すなわち、第22巻では天秤に載せられるのが「一つはアキレウスの、一つは馬を馴らすヘクトルの運命」(211)であるのに対し、第8巻においては「馬を馴らすトロイア勢と青銅の鎧のアカイア勢の」(71)運命だと述べられるのである。

そして『イリアス』第8巻では、上の四行に続いて次のように語られている。

アカイア勢の運命は、すべてを養う大地に向かって
下がり、トロイア勢のは広大な天に向かってつり上がった。

(『イリアス』8.73-74)

この二行は、72行後半の「アカイア勢の定めの日が沈んだ」という句のたんなる説明のように見えるため、冗漫な印象を与える。しかも73行では「運命」は keres と複数形で表わされており、70行の双数形の「運命」kere との間に意味的な矛盾が生じている。つまり70行によると、秤の二つの皿に載せられたのは、アカイア勢とトロイア勢それぞれの単一の「運命」ker なのであり ($1 \times 2 = 2$ で双数形 kere となる)、一つの皿に複数の「運命」が置かれたのではないからである。さらに上の二行には、もう一つ奇妙な表現が見られる。それは74行冒頭の hezes-then である。ここでは一応「下がる」と訳したのであるが、厳密には動詞 hezomai は「座る」を意味し、したがって「アカイア勢の運命(を載せた皿)は大地の上に座った」と解すべきである。また、hezesthen はそもそも双数形の動詞であるが、その主語は明らかに「アカイア勢の運命(複数)」だから、この点も不可解である。

文法的にも意味上も問題の多いこの二行は、すでにアレクサンドリア時代の文献学者たちの議論の対象となったようである。そして彼らが思案の挙げ句に達した結論は、この二行に対して、ホメロスの真正の詩句ではないことを示すマークを付けるという常套手段の採用であった(『イリアス』第8巻73-74行への古注：アリストタルコスの見解)。こうして後代の挿入だとするならば、問題は一挙に解決するであろう。その後の現代の注釈書でも、古注のアリストタルコスの意見に対する積極的な反論は見られない。

この第8巻73-74行の問題に関し、筆者はそれらが紛れもなくホメロス自身の語った詩句であると確信を持って主張できるわけではない。ただ、この二行の文を作った詩人(それがホメロスかどうかはわからない)が、これほど明瞭な不手際にもかかわらず何ら訂正を施さなかったことはまったく不思議である。明らかな矛盾があるにもかかわらず、それらがこの個所に配置され、長い間伝承されてきた理由は何であろうか。筆者の考えでは、その理由は、第8巻の運命の計量の場面が、伝統的な運命の秤の描写にはなかった本質的に新たな要素を含む点と密接な関係にあると思われる。

II

前章で述べたように、ホメロスにおける運命の秤の場面は二箇所あり、その一つの——そして文学史上最も重要な——『イリアス』第22巻の場面では二人の英雄の個々の運命が量られ、それに対して『イリアス』第8巻の場面では、戦い合う二つの軍勢という複数の人間たちの運命がそれぞれ天秤の両の皿に載せられた。このうち第22巻の英雄たちの死運の計量は、視覚的に明瞭なイメージを与えるであろう。現実の古代ギリシアにおける天秤の使用についての最古の言及は、やはり『イリアス』中に見いだされる。すなわち『イリアス』第12巻において、ギリシア軍とトロイア軍の戦闘状況を描くために、詩人は次のような比喩を語っている

糸紡ぎの実直な女が、天秤をもち、

両端に錘りと羊毛を載せ、釣り合わせながら
持ち上げるように——それも子供のためにわずかな日銭を稼ぐため——、
そのように両軍は、互角の戦闘で張り合った。

(『イリアス』12.433-436)

この描写から、一本の天秤竿の両端に皿が吊され、皿の一方には計量対象を、他方には分銅のような錘りを載せて竿の中央を持ち上げて均衡を取る、という古代人の日常生活の一駒がありありと想像されよう。このような日常的光景を背景として、第22巻ではゼウスが天秤棒の中央を支えてアキレウスとヘクトルの運命の重さを量る。重くて皿が下がった方の運命(ker)は、死と定められる。この皿の下降と死との関係は、死者の国は地下にあり、皿の下がった運命はそこに向かうという空間的イメージから生じたのであろう。また人間の死の運命(moira)は、各自にあらかじめ与えられた寿命を、三人のモイラ(運命の女神たち)が日夜紡いでいくものという古い神話的・宗教的観念があった。運命の女神によって紡がれためいめいの人間の死の運命の重量は、せつせと製糸に励む女が原料の羊毛を紡いで作り出す毛糸の目方のようにますます増大していく。秤の皿に載せられた運命が重さのために下降することが死を意味するのは、このような連想にもとづくものであろう。

このように『イリアス』第22巻の秤の場面は、二人の英雄の死運の決定を表わすのにふさわしく、また視覚的な明確さと現実性を伴っている。他方、第8巻の秤の場面では、計量の対象は集団となる。この場面のゼウスによる計量の様子を語る言葉(8.69-72)が、構文と語彙において第22巻の秤の場面で用いられる表現ときわめて類似していることは先に述べた。そこから、おそらく神による秤の審判の場面の伝統的な定型的表現があったものと推測することができた。ホメロスは、既にストックされていた語彙と文型を用いて、第8巻の戦闘の語りに秤の場面を応用したと考えられる。集団の戦闘の成り行きが、神の秤によって決定されるという着想自体は、例えば上掲の第12巻の比喩からも説明することができよう。すなわちここでは、女が行なう秤の計量の光景が両軍の戦闘状況のたとえとして用いられ、釣り合って水平を保つ秤竿によって戦力の均衡が表わされているのである。このような連想にもとづいて詩人は、第8巻においてギリシア軍とトロイア軍の勝敗を神の秤によって語ろうとしたと思われる。しかし、第8巻の場合、秤の場面はたんなる比喩ではないことに注意すべきである。神の秤には、量るべき対象が現実に載せられ、計量が実際に行なわれねばならない(あるいは、そのように描かれなければならない)。しかもその際、ホメロスの用いることのできる定型的表現は、「二つの、永い悲嘆を招く死の運命をそこに載せた」となっていた。天秤の両皿にはそれぞれ一つずつ「運命」を載せて量るというのが、伝統的な叙事詩の技法の要請するところだったのである。おそらく、ここで詩人は、一つの飛躍を試みることになったと想像される。すなわち彼は、神ゼウスが天秤の両皿に一個ずつ「死の運命」を載せる様を表わす定型的表現に続けて、「馬を

馴らすトロイア勢と青銅の鎧のアカイア勢の」という——これもまたフォーミュラの一つである (II. 8.71=3.127,131) ——詩句を置いたのである。その結果、一つのケールが複数の人間の死の「運命」を表わすことになった。これは、従来の（つまりホメロスの作品の他の個所の）用例には見られない異例の用法である。だが、異例の事態はたんに「ケール」の概念の拡大についてのみ言えるのではない。ホメロスの飛躍の最大のポイントは、比喩においてではなく、神が行なう現実的イメージの伴うべき秤の場面で、個人ではなく人間の集団の運命を計量の対象にしたことである。しかし、たとえゼウスであっても、はたして複数の人間の死の運命を、一回の秤の計量によって一挙に決定することは可能なのであろうか。

集団の運命を神が秤で裁定するこの第8巻の場面は、こうした意味で文学史上きわめて興味深い個所である。そしてこれがホメロスの発明であったのかどうかは、ギリシア文学だけを調べていてはわからない。なぜなら、ホメロスの作品より以前には古代ギリシアの文学は残されていないからである。そこで筆者は、上に述べた秤の場面に関するホメロスの創造とその問題点をよりの確に把握するため、ギリシア文学の外側にも視線を向けて、できるかぎり広範に先例や類例などを探ってみたいと思う。

III

1. 古代エジプトにおける運命の秤

古代エジプトにおける秤による人間の運命の決定のモチーフは、死後の審判に関わるものとして現われる。このモチーフは、王や貴族の墓の壁画などの絵画資料にも認められるが、とくにその機能と意味について明確な証言を提供してくれるのは、いわゆる『死者の書』と呼ばれる宗教文書である。『死者の書』は葬儀の際に遺体（ミイラ）とともに棺の中に副葬されたパピルス紙の書物であり、ピラミッドの壁面や棺に記された最古のテキストの改訂本（ヘリオポリス・テキスト）は古王朝時代の紀元前三千年紀にさかのぼるが、現存するパピルス本（写本）は紀元前16世紀に始まる新王朝時代以降のものである。ここでは、新王朝時代以降の14のパピルス本を編纂して190章にまとめた E. A. W. バッジの英訳テキストを用いる（和訳は筆者による）。

まず、『死者の書』における神の秤あるいは秤の審判についての記述を、各章の順に取り出してみる。

- (1) 「栄えあれ、秤で天と地を量り、豊かに墓の食物を与える、靈魂の神殿のすべての神々よ」
（『死者の書』冒頭「昇る太陽神ラーに捧げる賛歌」、アニのパピルス）
- (2) 「彼（アニ）はまだそこ（秤）に登っていない。天秤は今うつろである。」（第1章、葬儀の際の神官の呪文、アニのパピルス）
- (3) 「おおラーよ、あなたを讃える賛歌なり。あなたはセブ神（大地の神）の眉の上なる秘密

- の門を守りたまう、ラーの秤のそばにて。(天秤によって)ラーは日ごと正義と真実(マアト)を持ち上げる。」(第12章, ヌウのパピルス)
- (4)「その(ラーの)眉は、報いの滅びの夜の秤の二つの腕のごとし。」(第17章, アニのパピルス)
- (5)「わが心臓よ, わが母よ, わが生のみなもと心臓よ, どうか審判のとき, 何もわたしに立ちふさがらぬよう。至高の主ら(オシリスの臣下)の前で, わたしを妨げるものがないように。天秤を守る方の前で, おまえがわたしと別れることがないように。おまえはわが体に住むカーである。」(第30章B, アニのパピルス)
- (6)「オシリスの前の偉大な神々の仲間, 正義と真実の判定者トト神は言う。『この審判を聞け。まことにオシリスの心臓は量られ, その靈魂は神のために証言した。その靈魂は, 偉大な天秤の審判によって真実であることが判明した。神には何の邪悪も見いだされなかった。』」(「審判」, アニのパピルス)
- (8)「栄えあれ, 判定を下し, ウジャトの審判の夜に天秤を支える七つの神霊よ」(第71章, ネブセニのパピルス)
- (9)「おお, 天秤を吊り上げ, この日ラーの鼻孔まで正義と真実を持ち上げる者よ, どうかわたしの首をわたしから落ちないようにしてください。」(第105章, ヌウのパピルス)
- (10)「この(正義と真理の二重広間の)扉の門はいう。『われらの名を言わぬなら, この中におまえを入れることはできぬ。』『正義と真実の場所の(天秤の)針こそ, あなたの名。』この扉の右のまぐさは言う。『わが名を言わぬなら, おまえを入れることはできぬ。』『正義と真実を支える天秤こそ, あなたの名。』」(第125章, ヌウのパピルス)
- (11)「イシスの子ホルスは言う。『おおうネフェルよ, わたしはあなたのところに参りました。オシリス—アニを連れてきました。かれの心臓は正しく, 秤を通過しました。かれの心臓は神や女神に対して罪を犯していません。トトは, 神々の集いが布告した掟にしたがって, それを量りました。』」(「審判」, アニのパピルス)
- (12)「わたしは秤で裁かれました。わたしの言葉は正しく真実です。」(第138章, ヌウのパピルス)
- (13)「栄えあれ, 書記ネブセニよ, おまえは偉大な館(審判の間)に敵を持たぬ。おまえが量られたとき, 天秤は均衡を保った。」(第178章, ネブセニのパピルス)

以上の『死者の書』の記述は、テーベ・テキストと呼ばれる新王朝時代の改訂本にもとづく古写本のうち、「ヌウ」「アニ」「ネブセニ」の三種類のパピルス本に見られるものである。三種の写本間には異同が多く、テキストの長さもまちまちであるが、古代エジプト宗教に現われた秤の審判のモチーフについてはある程度明確な情報を得ることができる。また写本には挿画が描かれており、テキストの内容を確かめるのに役立つ。

まず(1)の「ラー神への賛歌」の一部では、太陽神ラーが「秤で天と地を量る」神として讃えられる。ラーは「父なる神」と言われ、天地と人類を創造した神であり、そして自己が創造した宇宙を統治した。ラーはまた、正義の女神マアトに朝夕抱かれると讃えられるように（『死者の書』「ラーに捧げる賛歌」）、正義の観念と密接な関係を持つ神であった。(1)の「秤で天と地を量る」という語句は、ラー神の天地創造の業と正義の監視者の役割を同時に表現したものであろう。しかし(3)(4)(6)(9)では、ラーの審判者としての具体的な役目について言及される。例えば(3)では、ラーが秤を持ち、それによって正義と真実の化身であるマアトを毎日持ち上げると述べられている。これは、そもそもラーが正邪を裁く審判の神であり、そしてその仕事が、天秤の皿の一方にマアトという羽根の姿をした正義の神を載せ、他方の皿には裁かれるものを載せて行なわれたことを示している。さらに(4)と(9)によると、ラーの審判は、死後の運命に関するものであったことがわかる。(4)ではラーの左右の眉は、「報いの滅びの夜の秤」すなわち死後の審判の秤の竿にたとえられ、そして(9)では、死後の審判で死者の重みが正義のマアトの秤の皿を吊り上げさせ、その皿がラーの鼻まで達しないようにと述べられている。第125章の有名な死後の審判の場面では、判定者はオシリス神であるが、元来その特権はラー神に属していたと伝えられる。実際オシリスもまた、地下の審判の神になる前に「偉大な天秤の審判」（すなわちラーの秤の審判）によって裁かれたことが、(6)の記述からうかがうことができる。

このように、『死者の書』の冒頭に「オシリスへの賛歌」とともに太陽神賛歌が置かれたのは、ラー神こそが死者の国の最初の権威ある判定者だったからにはほかならない。ところで『死者の書』は、死者が冥界での旅で出会うさまざまな障害を克服するための呪文を記した文書である。死者の魂は広大な砂漠を横切り、悪霊や悪魔などの敵を調伏し、ついに冥府の河を渡ってオシリスの王国に到着したなら、そこで厳正な審判を受けねばならない。『死者の書』には、そうした死後の旅のあらゆる試練を無事通過できるように、それぞれの場面において死者が唱えるべき言葉が克明に書かれているのである。そして秤の審判はそれらの死者の試練の中で最大かつ最後のものである。したがって(2)の記述のように、すでに最初の葬儀の段階の呪文の中で「秤」に言及した『死者の書』もあった。

審判の秤についての言及は、死者が冥界で話したり食べたりできるための「開口の儀式」のあと、心臓の力を強化する目的で唱えられる祈禱文にも見られる。すなわち(5)の呪文は、その祈禱の最後の部分であり、そこでは、人間の生命力と精神（カー）の在り場所である心臓が力を獲得したあと、それが死の国で待ち受ける秤の審判で障害に遇ったり奪われたりすることがないようにとの祈りが記されている。この祈禱は儀式の指示書（アメン・ヘテプのパピロスの「ルブリク」）によると、緑色の石のスカラベの護符に向かって唱えられ、その護符は死者の首にぶら下げられるようにと指図されており、それが死後の旅の準備のためのものであったことがわかるが、しかし幾つかのパピルス本では、この章にはオシリスの法廷での秤の場面を描いた挿画が添えられている。例えばネブセニのパピルスの挿画では、右側にオシリスが座り、左側

に天秤が置かれ、その天秤の左右の皿にはマアトと心臓が載せられていて、一匹の猿が錘りで天秤竿の均衡を取っている様子が描かれている。

一方(8)は、オシリスの国で邪悪な者を罰する七つの神霊に対する祈禱文の一部であるが、ここではその神霊たちが、「ウジャトの審判」すなわちラー神の権威の下で行なわれる死者の審判において（ウジャトはラーを表わす眼）天秤を支え、判定を左右する力を持つことが示されている。そして第71章全体には、この神霊たちに対する死者のさまざまな申立てが述べられている。

さて、いよいよ死者がオシリスの法廷に到着したとき、彼は三つの段階からなる審判を受けることになる。この三段階の審判は、次のように『死者の書』第125章をなす三つの部分に対応している（括弧内はバジ版に収録のテキストの写本）。

- ①正義と真理（マアト）の二重広間に入る——「序」（アニのパピルス，ヌウのパピルス）
- ②否定告白を行なう——「否定告白」（ネブセニのパピルス）
- ③冥府の神々に対して申立てを行なう——「冥府の神々への言葉」（ヌウのパピルス）

死者はマアトの広間の前に着くと、まずその中に入る許可を得なければならない。この①の部分を書いたアニのパピルスには、オシリスとイシスの二神が並んで立っている挿画が描かれている。ここで死者は自己の到着を告げ、これまでの旅と訪れた神殿などについて報告する。次に山犬の頭をしたアヌビス神が、広間の扉などの謎めいた名前を尋ね、死者はそれに答えることができは中に入ることができる。

第二の否定告白は、マアトの広間で行なわれる。この場面の挿画は多数あり、バジ版の第125章では、(A) 羽根を頭に付けた42の神々の列と二柱のマアト女神（右端）を描いたネブセニのパピルスの絵、(B) 上段に二柱のマアト、第二段にアニとオシリス、第三段にアヌビスと秤と怪物アメミット、最下段に羽根とトト神を描いたアニのパピルスの絵、(C) 20の審判官を描いたアンハイのパピルスの絵、(D) 22の審判官を描いたアンハイのパピルスの絵が採録されているが、アニのパピルスの初めに置かれた「審判」の章に描かれた挿画（上段にフウトサー、ハトホル、ホルス、イシスとネフティスなどの12神、下段にアニと妻トゥトゥ、天秤、アヌビス、トト、アメミットなど）もこの場面に対応している。ネブセニのパピルスによると、このとき死者は42の審判の神々のそれぞれに順次呼びかけ、生前において42の罪を犯さなかったことを証言していく。一方この否定告白と同時にその直後に、死者の心臓がアヌビス神によって天秤に載せられ、片方の皿には正義と真理のマアトの羽根が置かれて量られたであろう。そのことは、アニやネブセニのパピルスなどの挿画から明らかである。挿画によると、計量は山犬の頭を持つアヌビス神が行なう。そのそばには朱鷺の頭のトト神が立ち、書板に計量の結果を記録する。この秤量において、死者の心臓の方が重く真理の羽根が吊り上がったならば、彼の否定告白は虚偽と判断され、待ち構えた怪物アメミットが即座に心臓を呑み込むが、しかし双方の皿が釣り合ったなら、死者の証言は正しく、彼に罪状はなく潔白であるとされる（上

記(3)(5)(6)(9)参照)。

また秤の審判についての言及は、第三の冥府の神々への申立てにも見られる。すなわちヌウのパピルスによると、ここでも死者は罪を否定し身体の清らかなことを誓うが、そのあと(10)のように、マアトの広間に入る前の謎めいた質問に対して答えた際、死者が秤の審判についての正しい知識を持っていたことが述べられる。そしてこの申立てが認められれば、(11)のアニのパピルスの記述が示すように、死者はイシスの子ホルス神によって導かれてオシリス神(ウンネフェル)の前に行き、やがてオシリスの国に迎えられることになる。(12)のテキストは、こうして死者が神々の仲間入りするときの文句であり、また(13)は、死者の靈魂が肉体に蘇生したことを告げる言葉であるが、いずれにおいても秤の審判の結果が、死者の将来を保証するものとして言及されている。

以上において、『死者の書』の中から秤の審判についての言及を取り出し、その役割と性格をコンテキストに即して解説してみた。そこから明らかになったことは、古代エジプトでは秤の審判は、冥界において人間の死後の運命をめぐって行なわれるものであり、さらにまた、それは死者個人の来世を決定するものであって、けっして複数の死霊が秤によって同時に裁かれるとは考えられていなかったという点である。『死者の書』のパピルスは、死者が一人で訪ねねばならない死後の世界の恐ろしい旅を案内し、その一人の死者だけを守り救済する言葉と呪文からなっていた。したがってそれは、冥界の王オシリスの館の審判でも、死者は一人ずつ告白を行ない、それを検証するためにめいめいの心臓の重さが秤によって量られるのだと教えている。そもそも秤自体の構造から、それが一挙に複数の物体の重さを計量することは不可能であろう。個々の死者の罪の有無を判定するには、それぞれの死者の申し分を聴取する必要があるのと同様、その言葉を確認するために、死者の真の性格を表わす心臓もやはり各々秤量されねばならないと考えられたのは至極当然のこのように思われる。

このように古代エジプトでは、秤の審判は死者個人の未来に関わるものであった。ところでこのことは一方、古代エジプト人の来世観においては、多くの死者を一挙に裁くという観念、すなわちユダヤ・キリスト教的な「最後の審判」の概念がなかったからだとも言えるであろうか。つまりエジプト宗教では、終末の到来、そして全人類の罪の判定という出来事に思いを致すことがなかったので、死後の秤の審判もまた、そのような普遍的規模の裁定と結びつく余地はなかったのであると。そこで筆者は、それについて考えるために、次にゾロアスター教典の例を検討してみたい。

2. ゾロアスター教における運命の秤

紀元前1200年頃の宗教家ゾロアスターの教義を記した古代ペルシア語の聖典『アヴェスタ』には、秤による死後の審判が語られている。これが、先に述べたエジプト宗教の影響によるものか否かはにわかに判断しがたく、またこの考察にとってもさほど大きな関心事でもない。こ

ここで筆者が目にするのは、ゾロアスター教においては、死後の秤の審判が述べられていると同時に、さらに人類的規模の集団的裁定すなわち「最後の審判」についてもまた説かれているという点である。この点でゾロアスター教はエジプト宗教と異なっている。さてその二種類の審判は、この古代宗教の教説においてどのように結びついていたのであろうか。

『アヴェスタ』の中で最古の部分であり、教祖ゾロアスター自身の言葉とされるアフラ・マズダへの賛歌「ガーサー」には、死後の審判のことが例えば次のように述べられている(テキストはJ. ダーメステターの仏訳版、和訳は筆者による)。

「おおアフラよ、将来起こることを尋ねます。正しい者にはどのような報いが、邪悪な者にはどんな報いが下されるのでしょうか。おおマズダよ、清算のときには、どうなるのでしょうか。」(『アヴェスタ』「ガーサー」ヤスナ31.14)

ここで「清算のとき」とは、死後の審判を指している。ゾロアスターによると、死者の靈魂は、生前に善という大義を助けるために何を行なったかについて厳正な審判を受ける。その審判の場所は、「チンワト橋」(選別者の橋)と呼ばれ(「ガーサー」ヤスナ51.13参照)、またその際予言者ゾロアスター自身が審判者としての何らかの役割を果たしたと考えられる(D. C. Pary, *The Zoroastrian Doctrine of A Future Life*, pp. 56-59参照)。その審判の様相について、「ガーサー」の次の記述は重要な示唆を与えている。

「裁く者は、第一の世界の法なるものにしたがって行動するように、そのように、邪悪な者に対して、正しい者に対して、また悪行と正しい行ないが等しく釣り合う者に対して、審判者として最も正しく振舞うでしょう。」

(『アヴェスタ』「ガーサー」ヤスナ33.1)

この一節で注目すべきは、死者の悪行と正しい行ないが考量される際、それらが秤によって量られることを暗示している点である。つまり審判者は、死者の「悪行」と「正しい行ない」とを天秤にかけ、悪行がまさる者と正しい行ないがまさる者、さらにはその両者が「釣り合う」者とを選別する。

秤の審判について、「ガーサー」のテキスト自体はこれ以上には明確な証言を提供してくれないが、後期ゾロアスター文献のパフラヴィ語文献は、「ガーサー」の不明瞭な点に関して詳細かつより具体的なイメージを与えている。例えば「ダータスターン・イ・メーヌーク・イ・クフラト」には、チンワト橋での死者の審判について次のような記述が見いだされる。

「そこで、ミスラとスラオシャとラシュヌの裁定が行なわれる。正しい者ラシュヌが、死霊

どもを秤にかけて量る。秤は、双方どちらにも依怙最良しない、正しい者にも邪悪な者にも、また領主にも君主にも。」

(「ダータスターン・イ・メヌーク・イ・クフラト」2.118-120)

また同じくパフラヴィ語文献の「アルターク・ヴィーラーズ・ナーマク」には、次のように記されている。

「正しい者スラオシャと守護神アータルに助けられて、私はたやすく、首尾よく、落ち着いて、そして勝ち誇るようにチンワト橋を渡った。守護神ミスラ、正しきラシユヌ、善良なヴァーイ、守護神たる強きヴァフラム、そして守護神アシュタートにも守られていた。・・・私アルターク・ヴィーラーズはまた、正しきラシユヌを見たが、彼は手に黄金の秤を持ち、正しい者と邪悪な者を量っていた。」

(「アルターク・ヴィーラーズ・ナーマク」5.2-5)

さらに、正邪の秤量のあと、死者はこのようにチンワト橋を渡るが、それについて、やはりパフラヴィ語文献の「ダータスターン・イ・デーニーク」は次のように述べている。

「(死後) 三日目に夜が明けると、靈魂の罪は、恐ろしく汚い、むっとした顔つきの乙女の姿で、悪事を満載して靈魂を迎える。そしてひどい匂いの北風が吹いてきて、靈魂はぶるぶる震えながら、審判に向かう。・・・靈魂の滅びが決まると、それは橋から落ち、地獄へ転落する。」

(「ダータスターン・イ・デーニーク」25.5)

パフラヴィ語文献によると、審判のあと死者がチンワト橋を渡る際、橋は判定の結果に従って二通りの形態をとると言われる。すなわちチンワト橋は、正しい靈魂が渡る時は幅を大きく広げ、邪悪な魂が渡ろうとすると、剃刀の刃ほどの狭さに縮まり、死者を奈落の底に落としてしまうのである(イラン語版「ブンダヒシュン」30.1.9-13、「ダータスターン・イ・デーニーク」21.2-8参照)。

以上のようにゾロアスター教では、死者の魂は死の何日か後に秤にかけられ、それによって正邪を判定されて、運命を二分する橋を渡るものと考えられた。橋は、正しいと判定された靈魂には楽土への容易な道となり、邪な魂には地獄への滑落の道となった。しかしここで注意すべきは、この死後の秤による計量と橋の試練は、死者のいわば個別裁判であって、その後の総審判では秤は用いられないことである。ゾロアスターの教義によると、ゾロアスターの千年紀のあと三番目の千年紀に、復活と総審判が行なわれると信じられた。これは、全人類を対象とするという点で総合的審判であるが、しかし同時にそれは、究極の裁定であるという意味で、

まさに最後の審判つまり終末裁判である。

さてそのゾロアスター教の終末裁判においては、人間すべての正邪を判別するものは火であるとされる。すなわちその時、神聖な火は大地を溶かして、灼熱の金属の河を地上に流すのである（『アヴェスタ』「ガーサー」ヤスナ30.7,31.19,51.9参照）。この河を、すべての人間は渡らねばならないが、「正しい者には、それは暖かいミルクのようであるが、邪悪な者には溶鉱の中を生身で歩くようなものである」（イラン語版「ブンダヒシュン」34.18-19参照）。こうして火による神判によって邪悪な者は絶滅し、正しい者は永遠の祝福を受けることとなる。またそれと同時にこの時は、世界創成以来繰り広げられた宇宙的闘争の総決算の日でもあり、溶けた金属の流れは、地下の闇の世界にも注ぎ込まれて悪霊アフリマンを殺し、生命と光の善なる神アフラ・マズダに永久の勝利をもたらすとされている（イラン語版「ブンダヒシュン」30.32参照）。

ゾロアスター教の終末裁判ではこのように、あたかも火山の爆発によって流出した多量の溶岩が一度に夥しい数の人間を滅ぼすように、炎熱で溶けた金属の洪水が正邪を選別して悪を掃滅するものと考えられた。正しい者に対して溶鉱の流れは、まるで「暖かいミルク」のように何の破壊力もないという魔術的なモチーフは、おそらくゾロアスター以前からの古いペルシアの宗教儀礼の一つである火による神前裁判の習慣に由来するものであろう。そもそも神的審判の能力と機能を備えた火は、終末裁判では古来の儀式のように個々の人間の正邪を判別するのであるが、さらにそれは、真っ赤に溶解した金属の流体となって全人類を瞬時のうちに一挙に選別するというダイナミックな力を発揮する。このようにゾロアスター教の最後の審判は、火というあやまたぬ的確な神力の顕現であるのみならず、抗いがたい圧倒的な迫力をもって、迅速に無数の人間を巻き込み峻別する大規模な異変現象として進行するものと考えられた。だからこそそれは、不信心な悪人には限りない恐怖を与え、また虐げられた信仰の篤い善人には大きな希望を吹き込む強い力を秘めていたのである。一方秤による計量は、この溶けた金属の奔流のイメージに比べると個別的であり、静的であり、また緩慢である。天秤の静止した支柱や秤竿の緩やかな動き、さらに小さな天秤皿のイメージは、縦横に大地を走る熱い金属流とは対照的である。つまり秤の計量は、大規模な集団の判定には適合しにくく、ダイナミズムにも欠けるため、終末裁判にはふさわしい形態であるとは考えられなかったのであろう。したがって、そもそも火を神力の象徴として信仰するゾロアスター教徒が、最後の審判を秤とは結びつけず、炎熱の溶鉱による試練として思い描いたのは当然であったと言える。

以上のようにゾロアスター教では、エジプト宗教とは違って、死後における個々の審判とは別に世界の終末時に総審判が行なわれると信じられたとはいえ、その終末裁判は火の力によるものとされ、死者の個別裁判における秤による計量とは異なる形態で描かれた。秤は死者を一人ひとり裁くには適しているが、多くの人間の運命に関して、個々の正邪を選別しながら、しかも素早く判定するにはふさわしくなかったのである。

ところで、ゾロアスター教と同じく終末裁判の観念を持ちながらも、その最後の審判を溶岩流のような物質的威力ではなく、エジプト以来の秤による計量と関連づけた古代宗教が存在した。すなわちそれは、古代ユダヤ教である。

3. ユダヤ教における運命の秤

ユダヤ教の教説において、秤による計量のモチーフは死後の審判だけに限定されていたわけではない。現在『旧約聖書』に残る標準的宗教テキストでは、秤のモチーフが人間の現世の精神的在り方に関して用いられている場合が多い。例えば「ヨブ記」には、

もし、わたしがうそとともに歩み、
わたしの足が偽りに向かって
急いだことがあるなら、
正しい秤をもってわたしを量れ。
そうすれば、神はわたしの潔白を知るであろう。

(「ヨブ記」 31.5-6)

と述べられており、また「箴言」には、

人の道は、自分の目にはすべてが潔しと見えるが、
しかし主は、人の魂を量る。

(「箴言」 16.2=21.2)

とあり、また同書には、

あなたが、われわれはこれを知らなかったといっても、
心を量る者は、それを悟らないであろうか。
あなたの魂を守る者は、それを知らないであろうか。
かれは、おのおのの行ないにより、人に報いないであろうか。

(「箴言」 24.12)

という記述がある。この一節は、神が現世の人間の魂の正しさを秤で量ることを示している。さらにまた「ダニエル書」には、

テケルは、あなたが秤で量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです。

(「ダニエル書」5.27)

と語られている。ここで「テケル」とは、神の意向を示した神聖な文字であり、その文字は、神がベルシャザル王の魂を秤で量り、王の行為の正邪を判定したことを意味すると述べられている。一方ラテン語訳聖書（ウルガタ）に収録された「第四エズラ書」にも、

だから今、わたしたちの不義と世に住むやからの不義とを秤にかけてみてください。そうすれば、秤がどちらに傾くかわかるでしょう。

(「第四エズラ書」3.34)

という記述がある。これはエズラが、人間たちのこの世の罪を裁くよう神に訴えた言葉である。

しかし、本稿の考察にとってより興味深いのは、最後の審判と秤との関係である。『旧約聖書』において最後の審判への言及は、例えば「ダニエル書」第7章に見られる。そこでは「数数の書物が開かれて」（10）、人類と諸民族が裁かれ、聖者たちの統治する地上の永遠の王国が始まると語られるが、審判の道具としての秤については述べられない。また同じ「ダニエル書」の第12章では、その時天使ミカエルが立ち上がり、「あの書に名を記された者はみな救われる」（1）と終末裁判の様子を描いているが、ここにも秤に関する言及はない。ユダヤ教典において最後の審判の場面に秤が登場するのは、『旧約』には採録されていない偽典に属するエチオピア語版「エノク書」の中である。エチオピア語版「エノク書」は、アラム語原典に遡り、そのギリシア語訳からの重訳であるが、古いユダヤ教の教義を伝えている。そこでは、エノクは幻覚の中で最後の審判の様子を目撃する。その第41章では、彼は自分が見た「天のすべての秘密」を語り、次のように述べている。

わたしは王国が分割され、人間の行ないが秤にかけられるさまを見た。そこにわたしは、選ばれた民と正しい人々の住む場所を見た。またわたしの目は、魂の主人を否定する罪人たちがそこから追いたてられ、引きずられていくさまを見た。

(エチオピア語版「エノク書」41.1)

またエノクは、審判の時の宇宙の再創造についても語り、そこで神が秤を操作する様子を描いている。

わたしは異なる稲妻と天空の星を見た。かの方がそれら一つひとつの名を呼び、またこれらのものがかの方に従うさまを見た。秤の上で、星が光の強度や占めるべき場所の幅、出現すべき時間、回転の時などをはかられるのを見た。

(エチオピア語版「エノク書」43.1-2)

次にエノクは、再び人間の審判についてこう述べる。

そのころ、あの天使たちが長い紐を与えられ、北の方へ飛翔するのを見た。わたしは天使に尋ねて言った。「なぜかれらは長い紐をつかんで行ったのですか。」天使はわたしに言った。「かれらは正しい人々の秤、正しい人々の綱を持ってきて、正しい人々が魂の主人の名に永久にすがれるようにするのです。選ばれた民は、選ばれた民とともに住みはじめましょう。これが、信仰に与えられて正義の言葉を強める秤です。その秤は、大地の奥に隠されたすべてのものを、荒野で滅ぼされたものを、また海の魚や獣に呑み込まれたものをあらわにするでしょう。・・・魂の主人は、栄光の座に選ばれた者を座らせ、選ばれた者は天上の聖人のあらゆる行ないを裁き、かれらの行為を秤で量るのです。」

(エチオピア語版「エノク書」61.1-5,8)

「エノク書」は幻想的表現に満ちており、そこから秤による審判の具体像を把握するのは難しい。しかし少なくとも、この世にいつか終末が到来して、そのとき天上の創造神が秤を用いて全人類の行為を裁き、その結果神を信じる正しい人間たちの世界が実現するという思想が語られていたことは明らかである。とはいえこの終末思想にとって、一つの難点は、秤による人類の選別が限りない時間を必要とすることであったと思われる。「エノク書」の秤による死者の計量に具体性が欠けるのは、このためであったと推測される。

ユダヤ教典において終末裁判と秤の計量との結びつきが成功しなかったため、その後のキリスト教文学においては、秤による計量のモチーフは最後の審判から死後の個別審判に引き戻されたようである。その最も顕著な例は、『新約聖書』偽典に属する「アブラハムの遺訓」の記述である。そのテキスト第12章では、何万もの死霊が裁判に駆り立てられ、罪の審判を受ける様子が詳細に語られている。それによると、死後の世界の二つの門の前に置かれた玉座に、太陽のように光り輝く天使ドキエルが天秤を持って座り、ドキエルの前には分厚い本の置かれた机があって、その左右には二人の天使がパピルスとインクと葦のペンを持って立っている。そして大天使ミカエルの監督の下に、ドキエルが死者の魂を天秤で量ると、右の天使は正しい行ないを記録し、左の天使は罪を書き留める。こうして計量の結果、死者の運命が決定されるが、その際罪と正しい行為とが等しく釣り合ったならば、その魂は楽土にも地獄にも行かず、別の場所に隔離され最後の審判を待つことになる。このきわめて具体的な計量の場面は、終末裁判ではなく、死のすぐあとの個別の予備審判に属するがゆえに可能となったものであろう。

4. イスラム教における運命の秤

上のようにユダヤ教とキリスト教では、終末裁判と魂の計量との関連は曖昧であり、具体的イメージに欠くものであった。ところが、この両宗教を母体とするイスラム教においては、最後の審判と秤による魂の計量とは強く結びつけられている。例えば教典『コーラン』では、次のように、そのことが繰り返し述べられている（引用は井筒俊彦訳）。

その日の秤は正確そのもの。量目が重く下った人は、間違いなく栄達の道に着く。がそのかわり量目の軽かった者は、結局我らの神兆に害をしかけたその罪で、自分自身を台なしにしてしまったということになろう。

（『コーラン』 7.7-8）

復活の日のためには、とくに正確な秤を設けようぞ。誰一人、不当な判定を受けることがないように、たとひ芥子一粒の重さであろうと、そのまま出して見せようぞ。勘定は我ら独りで全部引き受ける。

（『コーラン』 21.48）

その日嘲哂と喇叭が吹きならされてしまえば、もう縁つづきも何もあったものではない。お互いに（他人のことなど）尋ねている暇はありはしない。

その時、秤が重く下った人は幸福者。秤が軽い者どもは何もかももうおしまい。ジャハンナムの中に末永く住み込んで、焔に顔を煽られながら、唇から齒をむき出す。

（『コーラン』 23.103-106）

どんとどんと戸を叩く、何事ぞ、戸を叩く。
 戸を叩く音、そも何事ぞとはなんで知る。
 人々あたかも飛び散る蛾のごとく散らされる日。
 山々あたかも窳られた羊毛のごとくなる日。
 秤が重く下った者には、いと心地よい暮らしがあろう。
 秤が軽くはねた者には、底なしの穴が母となろう。
 が、さて、底なしの穴とはそもそもなんぞやとなんで知る。
 炎々と燃えさかる火（の穴）の謂い。

（『コーラン』 101.1-8）

『コーラン』では、いつ人類を襲ってくるかわからない終末の恐怖が、随所に語られている。終末の日が不気味な足音をたてて近づいてくることが、巧みで力強い詩的表現を用いて描き出

されているのである。そしてその最後の日に、天秤の皿が下がった者は天国へ行き、皿がはね上がった者は地獄の劫火の中に転落することが、幾度も喚起される。しかし秤による魂の計量は、どのようになされるのか。その場面を詳しく描いた個所は、教典の中には見いだされない。それを詳述すれば、審判は幾千年もの期間にわたるものとなろうし、またイスラム教義ではそのように構想されていたかもしれない。だが教典としての『コーラン』の成功は、論理的には途轍もない時間のかかる秤の計量というモチーフを終末裁判のテーマに組み込む際、秤という判定の道具の厳正さと、審判到来の恐怖感とをひたすら強調して、秤の審判に内在した時間的長さという難点をうまく回避したことに由来するものであろう。イスラム教では秤による計量は、死後の個別裁判としてはなされず、終末裁判でのみ行なわれるとされた。そして終末の時がいづ来るかは、神だけが知るとされた。それゆえ人間は、自己のすべての行為が秤にかけられる日は、死後でなくとも、今すぐにもやってくるかもしれないという恐怖を何よりも強く抱くことになる。もはや終末裁判は、逃れるすべもないほど瞬時に行なわれる必要はないのである。こうして『コーラン』は、審判は今にも到来するという観念によって、総審判は迅速に行なわれねばならないというゾロアスター教以来の通念を撃ち破った。恐ろしい終末が一度来れば、秤による計量にかかる長い時間は、もはや大きな問題とはならなかったのである。

IV

前章において、オリエントのさまざまな宗教に表われた秤による運命の計量のモチーフについて検討してみた。まず古代エジプトでは、それは死後の裁判の一場面をなし、死者個人の来世での運命を決定するものであった。次にゾロアスター教では、秤の審判はやはり死後の個別裁判をなしたが、しかしそれはとは別に全人類に対する終末の総裁判が行なわれると考えられ、その最後の審判においては、秤ではなく火で溶けた金属流が判定の手段となった。秤の判定は個別的で緩慢であることが、終末裁判に適合しなかった理由と考えられる。しかしその後ユダヤ教では、秤による計量を最後の審判の方法に採用する説も試みられた。だが、ユダヤ教の試みは明確なイメージを結ばず、成功であったとは思われない。とりわけ秤による計量の個別性と時間の問題が、障害になったと考えられる。ところがその障害を克服して、秤を終末裁判に取り入れたのはイスラム教であった。『コーラン』は、死後の個別審判を重視せず、終末裁判の恐怖をもっぱら強調することによって、秤による計量の時間の問題を解決したのである。

ところで、以上の事例を通して言えることは、秤による運命の計量は個別的に行なわれるもので、そのこと自体は死後の個別審判にせよ終末の総審判にせよ事情は変わらないという点である。終末裁判も、結局は人間一人ひとりの審判であり、だからこそイスラム教では秤がその道具として最適である考えられたのである。そして今ホメロスの『イリアス』第8巻のゼウスによるギリシア勢とトロイア勢の運命に関する秤の計量に視点を戻すと、その異例さが強く感じられる。たしかに、前章で検討したエジプト宗教以外の事例のほとんどはホメロスよりもの

ちの時代のものである。しかし問題は歴史的なつながりであるよりは、むしろモチーフの普遍的性質である。

秤による計量は、どのような場合にも人間個人の運命に関わるものであり、それは人間の集団の運命の判定に用いることはほとんど不可能である。しかしホメロスは、あえてこの不可能を実行した。不可能を可能にする手段は、ギリシア勢とトロイア勢のそれぞれ多数の「運命」(keres)を単数の「運命」(ker)に集約させ、一つずつのものとして天秤の両皿に載せることであった。こうして二つの人間の集団は、天秤によって計量可能となったが、しかし秤が個人の運命を量るという通念からすれば、これは一種の混乱である。詩人が73行でアカイア勢の「運命」を再びker(単数)とせずkeres(複数)としたのは、この概念上の混乱を反映するものと思われる。

主な参考文献

- E. A. W. Budge, *The Book of the Dead*, London 1923.
 M. E. Clark & W. D. E. Coulson, Memnon and Sarpedon, *Mus. Hel.* 35 (1978), 65-73.
 A. B. Cook, *Zeus*, II, Cambridge 1925, 99, 733-735, 859-868, 1148-1150.
 J. Darmesteter (ed.), *Le Zend-Avesta*, I - III, Paris 1960.
 B. C. Dietrich, The Judgment of Zeus, *Rhein. Mus. f. Philol.* 107 (1964), 97-125.
 J. Duchemin, *Mythes grecs et sources orientales*, Paris 1995, 267-290.
 A. V. W. Jackson, *Zoroaster. The Prophet of Ancient Iran*, New York 1965.
 Id., *Zoroastrian Studies*, New York 1965.
 G. S. Kirk (ed.), *The Iliad: A Commentary*, II, Cambridge 1990, 303-304.
 J. A. MacCulloch, Eschatology, *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, V, New York 1912, 372-391.
 F. Max Müller, etc. (ed.), *The Sacred Books of the East*.
 M. P. Nilsson, *Geschichte der griechischen Religion*, I, München 1955, 224-225, 366-369.
 J. D. C. Pavry, *The Zoroastrian Doctrine of A Future Life*, New York 1965.
 W. H. Roscher, *Ausführliches Lexikon der griechischen und römischen Mythologie*, I, Leipzig 1884, 1135-1145.
 E. Wüst, Psychostasie, *RE* 23. 2, 1439-1458.
 メアリー・ボイス 『ゾロアスター教』, 筑摩書房 1983.
 石上玄一郎 『エジプトの死者の書』, 第三文明社 1989.
 伊藤義教 (訳・注), 『アヴェスター』, 『世界古典文学全集』 3, 筑摩書房 1967.
 井筒俊彦 (訳), 『コーラン』, 岩波書店 1964.
 『聖書外典偽典』, 全7巻, 教文館.